

むしりくは淡柄の河筋の嶺に影撫子
 光媪と阿弥洗濯と彼桃を節が

お伽文字紙小想文凡の初登山寺子朋友の
 假名垣三人余は勤修て道に依傍
 此哉舞の影瘦るを相續あて為す
 舊衣をも洗滌くは其まよ

薪水の功山崎の奥秘をも
 你く居る一と路次の技おふ
 青標史一巻をどるも後ぬ
 才の未口唄も若表紙と含意

面貌も赤本と今更難子の頓使は懐く
 あくね業ありと固持よりあゝ兼借て
 大骨折る人も益よ三本とね哉佐の
 後智恵拙工所もよるに足る

日本一の奇味候時とは賞歌ありあり
 隠蓑笠打出の小櫃三ツの宝物の
 直極古衣立成歌ふはよん

の桃と世は流のやよあつらんせ
 阿つひよりくねひつらんせ

二世 樂亭西馬謹白

賀朝号

久しうや字よりある存も友次第 かつ以
 中よりあさか一もゆる中の物も言ふ風 其水

弓よりは手も継ぎのや菊もよあ 梅園
 文の右のたけ 月まの宵ころろ 玄魚

おとよこ、羽風あつし 暖る存 喜水
 つの結る月の上あり 晴る縄 有人
 むしりく 阿つひ 秋より 其の存 喜水

幸の茶月

